

# 埼玉育ちのグローバル人

## ちょっと海外に行ってみた

### 第3回「15年後に日本に戻ってきた」



SAITAMA

埼玉県マスコット

「コバトン」

近藤真理子さん



2000年3月31日に帰国し、翌日の4月1日から15年振りに日本で仕事を始めました。と言っても、スコットランドでの仕事に完全に区切りがついていなかったもので、何か月か行ったり来たりが続いたのと、単身で戻ってきたので、配偶者が日本で仕事を見つけるまで、夏休みなどの長期の休みの時には、スコットランドに戻る生活が2年半ほど続きました。日本に住んでいなかった間も、3年に一度くらいは何週間か帰国していたのですが、戻ってきて最初の2-3年は、社会人の大人としての生活や振舞いがちゃんとできず、ドギマギすることが多かったのを覚えています。もちろん、日本語は全部わかるし、日本のこともちゃんと覚えていたのですが、社会人になってからの殆どの期間、日本に住んでいなかったため、通常の社会人が仕事や生活で身に付けていく一般知識や常識が欠落していました。

おかしなもので、海外ではわからないことを聞くことは恥ずかしくなかったのに、日本でわからないことがあると、いい大人がそんなことも知らないのかと思われることがとても恥ずかしく、分からないままにしていたことが沢山ありました。簡単な例をあげれば、税金や銀行や保険のことなどです。イギリスでは躊躇なく聞いたのに、日本だとまさか学生じゃあるまいしと簡単に聞けない。他には、流行語や誰でも知っている有名人や、大きな出来事などの話が分からなくて、変に思われるということもありました。でも時間が経つう

ちに、なんとかまともな社会生活が送れるようになりました。



学生も参加した国際ワークショップ

日本の大学に初めて勤めてみて、一番困ったのが、教材を全部日本語に作り直さなければならなかったことです。教材作成はとても時間のかかる作業なので、新任の時と同じく、また一からやり直し。日本語の専門用語がわからないということもありました。私の場合は、さらに4年後に教育をすべて英語で行う国際教養学部へ異動したので、また日本語の教材を修正しつつ英語に戻すという不毛な作業をしなければならなりません。日本の学生は、イギリスの大学の学生とは、授業での反応などが細かいところで異なりますが、基本は世間で言うほどは変わらないと思います。初めてイギリスに行ったときに、留学生の多さに

驚きましたが、今は日本の大学にも沢山留学生がいます。特に、現在勤めている国際教養学部と国際コミュニケーション研究科には、50か国くらいから学生が来ていて、教員の国籍も十数か国に及びます。他の学部や研究科も状況は同じです。早稲田大学では文字通り世界中の大学と交換留学協定を結んでいて、私が学生だったころとは異なり、学生たちは世界中の大学に留学しています。



研究室所属の大学院生～8か国から来ています

最近よく、日本からアメリカの大学に留学する学生数が減っているなどという話が話題になったりします。日本からアメリカに行く学生数は減っているのかもしれませんが、アジアやアフリカ、中東や南米など、他の国・地域に行く学生数は、確実に増えているのではないかと思います。昔は、留学先はヨーロッパや北アメリカの大学が定番だったと思いますが、今は世界中の大学が行先になっています。留学が一つの国や地域に偏らないことは、いいことでしょう。私の研究室にも留学生が沢山いるというより、留学生の方が圧倒的に多く、特に大学院生の出身国は毎年8~10か国に及びます。日本に留学する動機や理由も昔は日本に関することを研究しているとか、日本語を専攻しているとかという学生が多かったと思いますが、私が所属している学部が英語で教育を行っているという理由もあると思いますが、日本語が全くできない学生もいますし、研究のテーマは特に日本に関するものでないこともごく普通です。ちょっと調べてみたら、ここ10年で私の学生が研究の対象とした言語

は17言語に上っていました。学生は、たまたま勉強したいことができるところ、一番適するコースがあるところが日本であった、または単純に日本で勉強してみたい、暮らしてみたいということで進学先として日本を選んでいるようです。

異なるものに対する興味や環境適応能力がある若いときに海外を経験することは、とてもいいことだと思いますが、今は海外に行かなくても、日本にいながらいろいろな国の人と一緒に勉強したり、仕事をしたり、切磋琢磨できることはとても恵まれた環境だと思います。

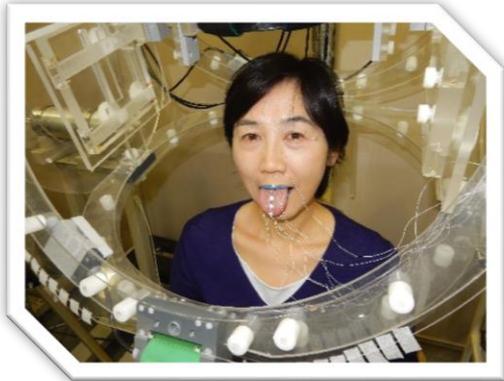
私は海外経験をするのが比較的遅かったですが、日本に帰ってきた今も、学会や実験、協定校訪問など、平均して年に4~5回海外に行く生活が続いています。2020年からは、コロナ禍のため海外に全く行かない年が2~3年続きましたが、ここ1~2年は以前の状態に戻ってきました。最近は学会も対面に戻りつつあります。国際学会で楽しみなのは、昔一緒に学んだ友人や元同僚と会えること、また最近では元学生と会う機会も増えてきて、研究に頑張っている様子などが垣間見られることです。日本で開催される国際学会で会うこともあります。



共同研究者たちとブリュッセルでワークショップ

音声学のような主に人間を対象とした研究をしていると、研究の条件にあう被験者を求めて、海外の大学や研究機関で被験者を探してもらったり、機材を借りたり、実験をさせてもらったりすることが多々あります。逆に被験者や機材、実験環境を

求めて共同研究者や知り合いが私の研究室に来ることがあります。昨今、研究は一人ではなく、いかに他の人と共同で行うか、特に海外の研究機関や研究者と共同研究を行っているかが評価の対象となります。また研究で困ったときなど、頼れるのは昔の同級生や同僚たち、気兼ねなく質問したり、相談に乗ってもらえる相手がいるのは、とても助かります。



舌と唇の動きの測定

大学では10-15年位毎に研究期間が取れるので、今でも時々長期で海外の研究機関に滞在する機会があります。私も、オーストラリアやフランス、スペインの大学や研究所に滞在させていただきましたが、つくづく思うのは、歳をとって体力・精神力が落ちてきてからよりも、若いとき・フットワークの軽いときに海外を経験するほうが、学ぶものが大きいのではないかと思います。機会があったら、是非海外を経験してみることをお勧めします。